

具、技術文化だけでなく、それらと密接に関連する、さまざまな感性、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどを通じて感知されるものはたらく領域や、相互の結びつきを明らかにしてゆくことである。まさに「非文字資料」

を活用しなければならないことであり、既成の研究が乏しいこの分野で、私たちCOEの研究に課せられた任務は、難しいが、やり甲斐があるといわなければならない。

各班の目指すもの

第3班

環境と景観の資料化と体系化

香月 洋一郎（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）



本プロジェクトの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトル自体、たいへん曖昧な一面をもっています。「文字資料以外のすべて」というものがその対象なのですから。そうして私たちの班のテーマ、「環境と景観の資料化と体系化」という表現もそれに負けず劣らず雲をつかむような茫漠さをもっています。身のまわりをとりかこみ、眼前に広がる世界のすべて、それを対象として資料化し体系化への道を探ろうというのですから。班の構成スタッフも、その専攻は歴史学、地理学、民俗学の三分野にわたり、プロジェクトが動きだしたばかりの今、ここでその着地点を明確にしぼりこむ形での説明は大変困難です。

もとより、とらえなければならないのは「環境」、「景観」といわれる複合的な事象のなかに存在する人間の意思のありようです。といってもその意思とは、為政者の統治感覚や姿勢のあらわれのこともあり、生産者の生産の場への配慮の場合もあり、またきわめて即物的な対応の結果もあり、ある営みが権利として認知されたプロセスの反映の場合もあり、シンボリックな意味が展開していく場の事例もあるでしょう。こうした世界では前の時代の矛盾が次の時代の可能性ともなり、その時代の「正義」がやがてそれとは異なるものへと転化していくこともあり得ます。

「環境」や「景観」といわれる世界の中には、それがどんなに激しくまた多彩に変化していても、そうした人間の営為のあゆみが、一見それとは気づかぬ形で、しかし明確にとどめられていて、私たちに語りかけてくれてい

るように思います。対象がどのように奔放で混沌としているように見えても、あるいは茫漠としていても、そこにはある類型やそうした重層が潜んでいます。それは人間社会を規制するものであるとともに、可能性を秘めている土壌でもあります。とらえどころのないように思える世界から、それをどのように浮きぼりにしていけるのか、そこにあらわれる時代性、社会性とはいったい何なのか、そうした模索の手の内をまず方法として示し得ること、換言すればそれが私達のテーマになると思います。

そのための具体的な道すじとしては、とりあえず①日本常民文化研究所の1930年代の生活記録写真や映像——写真は通称「渋沢フィルム」、現在活用可能なものは約4000点ほど——を活用しての景観の分析や時系列的研究、②日本の山村と島をいくつか選び、環境認識、景観認識とその変遷の調査研究、さらには③様々な人間の活動——この場合は主に政治的、政策的な背景をもつものや、また災害が社会にのこした痕跡の解説——の研究とそのデータ化、といったことを主要な柱にしてすすめていくつもりです。

前述したように、その対象世界は一見とりとめなく広がる世界です。その中から、人間社会を考えていくためのデータのすくいとり方を検討し、いやさらに踏みこんでいえば、データという言葉の意味するものの再検討を含めて新しい研究対象の世界を発見し、それを解説していきたいと希望しています。もちろんその先には、そうした成果と文字資料の関係性の追求、またそれをどう社会に発信していくのかといった問題があることは言をまちません。



非文字資料をデータ化すること、また文字表現を媒介とする研究の場で検討するということ自体、作業として矛盾を含んでいます。その矛盾とどう向きあうのか、それは研究者の個々のイマジネーションや洞察力がひとつの支えとなるでしょう。そうしてそのような問題意識を基にした研究会でその道筋をより明確にしていきたいと思っています。そうである以上、各々の内にある時代や社会や地域に対する認識とその足場として明確に示しあ

うところから始めなければなりません。ここで方法とは模索のスタイルの明示から離陸をし始めることになります。



花蓮県忠烈祠に改変された旧花蓮港神社（戦前は県社）



海辺に家々が短冊状に並ぶ新潟県出雲崎

各班の目指すもの

第4班

文化情報発信の新しい技術の開発

佐野 賢治（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授）



第4班は、70年以上にわたる日本常民文化研究所の図像・民具・写真資料に関する調査研究の蓄積を踏まえた1班から3班による資料の体系化の作業と共同しながら非文字資料を文化情報として発信するシステム、および新しい技法に習熟した専門技術者養成方法の開発を目指します。このプロジェクトの主題は、非文字資料、文字に表現されない人間の諸活動を資料化し、それを体系化することですが、わが班では、文字資料の伝存形態もその視野に入れながら、人間の諸活動のあとに残されたすべてを資料と捉え、大きく資料のあり方から人間の営み、生活

を追及することが可能であることを第一の前提として考えています。

第二に、図像、身体技法・感性、環境と景観、それぞれの具体的資料の体系化を目標とする他の班と違い、第4班は、①対象→②資料化→③データ化→④体系化→⑤公開化と資料処理のすべての段階をソフト・ハードの両面から扱います。そのために班員は文書・民俗・民具資料の伝存形態や資料の制度的・社会史的な扱い、情報理論・工学に関心を持ち、アジアや欧米の資料館（博物館・文書館・美術館など）の事情に詳しいもので構成さ